

瑞二だより

発行
江戸川区立
瑞江第二中学校
校長 滝澤 清豪
発行日11月19日
東京都江戸川区
瑞江4-54-1

父子の回顧録

朝礼より

(11月18日)

皆さんおはようございます。

先週から今週にかけて、3年生の長崎修学旅行プレゼンテーションのクラス発表が行われています。私も見させてもらいました。どの生徒も3年生らしく要点をついた、完成度の高い発表ですが3年生と感ぜました。その発表の中で、比較的多かったのが、平和学習に関するテーマでした。

世界で唯一の被爆国である日本は、原子爆弾や戦争自体の悲惨さを世界の国々にこれからも発信しなければならぬとまとめている発表が多かったです。その発表を受けて、私の今日の話は、私の父と滝澤少年の数少ない記憶の回顧録です。重い話である事は予め申ししておきます。

太平洋戦争の末期、日本軍は次第に追い詰められ、私の父の部隊もフィリピン

のルソン島で過酷な撤退戦を強いられていました。補給路は完全に断たれ、弾薬も食料も底をつき、兵士たちは次々と命を落としていきました。日本はポツダム宣言を受け入れ敗戦を迎えました。しかし、戦場で終戦を迎えた日本兵達がみならず、武装放棄して降伏したのではありませんでした。戦場において上官の言うことは絶対です。上官が「武器を捨てて降伏する」と決めなければ、兵士たちの戦いは終わらないのです。

父の所属した部隊も、多くの部隊のようにジャングルに逃げ込み、彷徨い、飢えと病に苦しみながら、必死に生き延びようとしていたのです。そのような中で父もまた、飢えに耐えきれずに毒キノコを口にし、意識を失う危機に直面しました。

父が倒れた時、周囲の兵士たちは進軍を優先せざるを得ず、父をその場に置いて去らざるを得ませんでした。毛布一枚をまとい、注

射を一本打たれ、大きな木下に置いて行かれました。そして、昏睡状態の中で、父は不思議な体験をしたのです。

そして、父は、「本当に三途の川はあるのだ」と私に語ってくれました。死の淵をさまよう中でこの体験は、父にとつて鮮明に刻まれた記憶でした。父はその後も一人でジャングルを歩き続け、奇跡的に別の日本軍部隊に合流し、日本の降伏を経て、ようやく命からがら日本へ帰還することができました。

父は言っていました。

「あの時、上官が我々は降伏すると言わなければ、まだジャングルの中を彷徨わなければいけなかった。上官の判断のおかげだよ。」私は小学校低学年でしたので、「じゃあ、その時まだ戦争を続けると言っていたなら、僕は生まれていなかったんだね。」と父に話しました。父は「そうだよ。」とさりと答えてくれました。

そして、私は父にいろいろな戦争体験話を聞き始めました。

父は身体の肩や足に戦争で傷を負った傷痕軍人です。

「お父さんの背中への傷はどうしてあるの？」

「戦場で大砲の弾が爆発して、破片が飛び散って、お父さんの肩に刺さったんだよ。」

「それでえぐれてるんだね。破片は取ったんでしょ。麻酔は戦場であつたの？」

「そんなのなかったよ。」

「麻酔なしで破片を取ったの？痛かったでしょ。」

「勿論だよ。」

「すごいね。」

「言うふうには話が進んでいきませんが、小学生の息子が何も知らないが故に言える言葉を父に放ってしまいました。」

「戦争って、人を殺すんですよ。お父さんは……？」

「……。」

父は黙って一点をじつと見つめていました。私は、「まずい事を聞いたのかな」と感じました。私たちが想像もできない戦場での状況を言いたくない、思い出したくない経験だったことは今では容易に理解できます。

父の黙った様子からその答えが出る前に、私は次の質問を続けました。

「戦争怖かった？」

「もちろん怖かったよ。」

「敵の弾に当たらないか怖かったでしょ？」

「清豪、戦争で本当に怖いのは敵の攻撃じゃないんだよ。」

「えっ！」

「清豪、戦争で本当に怖いのは、」

「味方……？」

「そう味方！」

「なんで？」

「戦争中、場所を移動して敵軍と交戦したんだけど、夜になってジャングルの中で野営をして、朝が来ると自分の荷物がなくなつて行くんだよ。例えば、石鹸、次はひげ剃りというふうにな。誰かが人のものを盗んでいくんだよ。」

「部隊の話でしょ。」

「勿論そうだよ、日本人同士でトラブルが起こつてきたんだ。そして、仕舞いには世が明けると人が居なくなつてしまふんだ。周りにいる仲間がだんだん減っていくんだよ。何があつたか分からない。次は誰が居なくなるのか、次は自分なのか？そしたら誰も信用出来なくなる。これが怖かった。」

「ほんとお……。」

「いいか清豪、戦争になると兵隊たちは普通の精神では居られなくなるんだよ。予想もしない行動を起こしてしまふのが戦争なんだ。敵は相手の国だけではないってことだよ。分かるかい。だから戦争なんてやってはいけないんだ。よく覚えておきなさい。」

この話は、戦場という極限状態において、命の境界線がいかに曖昧であるかを父が教えてくれた経験です。同時に、死の淵から引き戻された父の強い生命力と、身近な人たちの裏切りから逃れ、生き延びることに執念を燃やし命をつなげてくれた父に感謝するしかありません。父が居なければ、戦争から生きて帰つてこなければ、私はこの世に存在してはいないのですから。

父が語ってくれたこの不思議な出来事と驚くべき戦争の裏側の話は、戦争の悲惨さと共に、生きることの奇跡を私に深く刻み込んでくれました。戦争を経験した世代の人たちの語りを、私たちは決して忘れてはならないのです。戦後の平和な時代に生きる私たちにどうして、それは生き抜く力と希望を与えてくれる教訓となければなりません。

3年生は長崎で被爆体験者の方のお話を聞いてきました。良い勉強をさせていただきましたね。

以上で私の話を終わります。

校長 滝澤清豪